

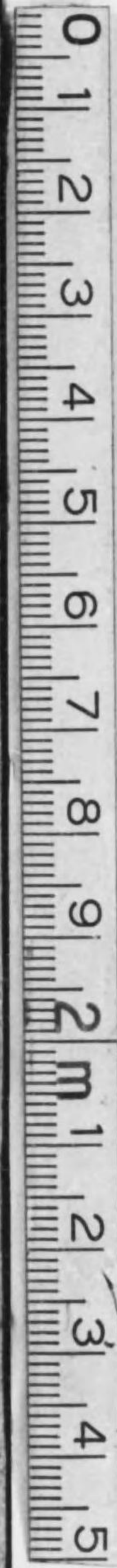
特252

287

五聖閣主 熊崎健翁先生講演

姓名尊重の大義

運命開發展覽會發行



始



特252  
287

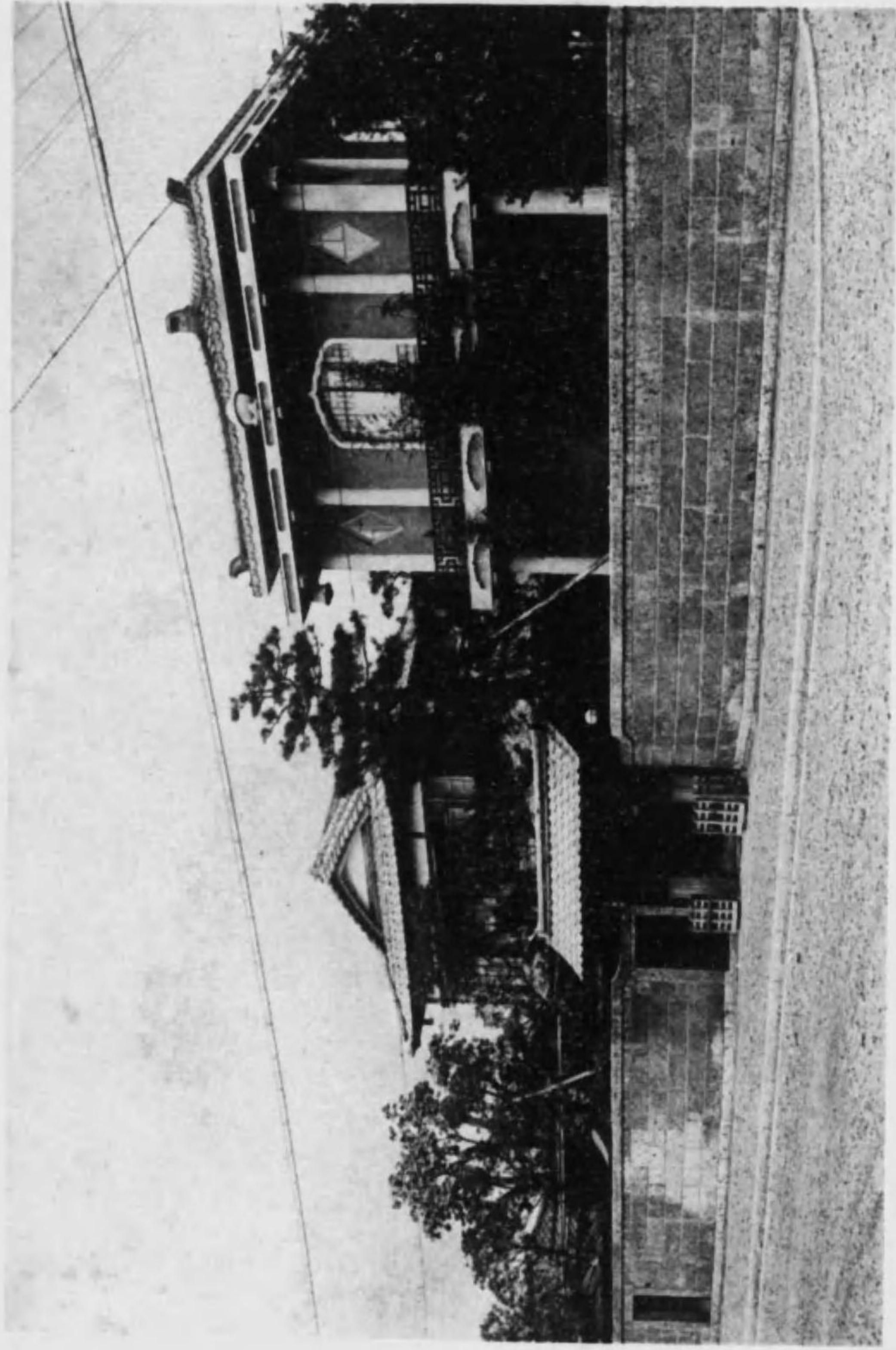
熊崎健翁聖師胸像



(長谷川義起氏制作)



姓名尊重の大義 (講演速記)



五 聖 園 本 部

## 自己の存在と姓名

蘆花の小品に『五分時の夢』といふのがあります。

——一夜、この主人公は平凡に倦み、不才をかこち、筆を折つて、

『吾を生かさむと欲せば平凡より救へ！』と祈つたのであります。すると、やがて光れる者、——  
即ち神が側に立ち現はれて、

『汝が祈は如何にも我が耳に届いた、先づ自分に従いて来るがいよ。……』

と導かるゝがまゝに、程なく兩人は見事な花園の前に立ちました。其處には花としてあらざるはなく、香として匂はざるはなく、忽ちにして酔はされてしまつたのであります。然るに、光れる者はその中から、蟻の眼よりも尙細かな一個の苔の花をとつて、

『汝耳を傾けて此の花の言葉を聞け、牡丹ならざるが故に敢て開かずといふや？』

と問ふたのであります。彼も一寸返事に詰まりましたが、『いゝえ、しかし私は無心の花たることとができません。』と答へますと、次には森の梢の雀を捕へて、『金鷺ならざるが故に飛ばすといふ

か？』と問はれ、大空の星を指しては、『太陽の如く大きく、近からざるが故に光らずといふか？』と問はれましたが、無智の小鳥たるも能はず、星であることにも満足ができないと云つて、遂に最後に天國の城壁の前に立たされ、『汝に力を與へるから彼の城壁を成して居る小石の一つを抜いて見よ。』と云はれましたので、『ソレを拔取らば流石に大なる城壁も崩るゝではありませんか？』と反問しました。すると、

『近く寄りてよく見よ！』

とのことに、尙前へ進み出てよくくその小石の面を注視しますと、其處には何と！自分の姓名が刻まれてあつたではありませんか！——そこでハツとして立ちすくむのであります。その時天父はかう戒しめられたのであります。

『我が城壁を築く石に大小の別なく、また美醜も敢へて問はない、しかもその一を缺くことはできないのだ、どうだ、是でも、汝は満足せぬか？』と。(拍手)

主人公も茲に飄然として悟り、主に詫びると同時にこの五分時の夢から醒める。——といふのがその大要でありまして、啄木の言を藉るまでもありませんが、『一切を疑ひ盡して然も遂に疑ふ

能はざるもの』即ち自己の存在であります。而してその自己の存在を、自他共に認識せしむるものが姓名であつて、行住座臥、夢寐にも離れざるのみか、肉體亡びて尙千載萬秋の後までも永劫に自己を代表し、自己を傳承するもの、それ姓名に非ずして何でありませうか。(拍手)

### 恐入つた珍名道樂

されば如何なる人と雖も姓名に關心を持たざるはなく、たとへ、「なアに名前など人間の符牒に過ぎんではないか!」と平常まるで無關心なるが如き人であらうとも、一度何か事生じて新聞紙上にその名の掲載せらるゝやうな場合、その善なると悪なるを問はず、斷じて無關心であることはできませんまい。況んや、見も知らざる他人に名を騙られて思ひもかけぬ濡れ衣を着せられたり、或は亦偶々同姓同名の變死體でもあつて見舞やら照會やらが舞込んだといふやうな事實に直面した場合、その時果して、「自分はその本人でないから」と平氣で済ませるでありませうか? — 否、常に符牒に過ぎない、など、無關心を装つて居る人程、善ければ有頂天となり、悪いときには人一倍狼狽して大騒ぎをするのが通例であります。(笑聲)

しかし、さうした衝動的な事件に遭遇してこそ始めて姓名の尊さ、有難さを痛感致しますが、そこが凡夫の淺ましきで、大切な子供の命名に際して此の「どうせ人間の符牒だ」といふ加減に片付ける人は案外に多く、さうかと思ふと落語の「壽限無」の如く凝つてしまふ人、また反對に自己の道樂や洒落氣から、將來子供が如何に迷惑するかも考へずに殊更に珍奇な名前を付けて得意になつて居る人もあります。

舊くは故大町桂月氏が「學生」といふ雑誌を編輯して居る時生れた男兒に是を記念すべく「學生」と命名した話や、與謝野晶子さんが泰西の大詩人にあやからせ度いとて「アウギユスト」と名付け、區役所へ届出たところが「混血兒ですか」と聞かれ、(笑聲) 大いに憤慨したといふ話、またJ O A Kの前社會教育課長仲木貞一氏が三男に「大尾」といふ名を付けて「生産事業ももう大尾さ」と納まつて居たところが、皮肉なもので程なく四男が誕生、今度は命名に困つて、仕方がない、「附録」としやう——(笑聲)と申しましたのは夫人が泣いて抗議を申込み、次に生れたら何とするんです? と詰め寄ると、「そりや(號外)とするさ!」(哄笑)には思はず吹き出してしまつたなどいふのは随分有名な話ですが、こんなのは未だ罪の軽い方で、近頃では○だの

△だのを何だ彼だとコチつけて名前につけ、之は一體文字か繪畫か何れに属すべきものなりや？とあつて戸籍係を惱まし、どんなもんだい?! と鼻をうごめかして居やうといふ、まことに質のよくないのが現はれました。(笑聲)

現に、肥前長崎に奇人を以て鳴る退役海軍一等信號水兵徳田眞壽氏の如き、日本精神の高揚とあつて紋付の洋服を着たり、人は貧乏なりやこそ働くのだとあつて、貧乏神を守神に祀つて居る(笑聲)などはともかく、三男八女といふ多勢の子供達に夫々奇妙天烈な名を付けてひとり悦に入つて居る由であります、○子(れい子) △子(みよ子) 甲子農子(かしのみ) はまだしも、有無子(うんこ) 蝶亂舞(ちようらんみやあ) お兎園戯(おとぼけ) (笑聲しきり) など、名付けられた子供達こそいゝ面の皮で、小學校なんかでも定めしこの珍名には惱まされて居ることゝ察せられますが、徳田氏は之でまだ満足せず、今度男児が生れたらかう名付けるのだと二十年來練りに練つたといふ、とつて置き珍名——何と!

「大隈院殿無我勿發理十方法界喜多幸羅采々入道觀音太郎兵衛源△□○」  
といふのださうで、(爆笑) これはどうも落語の「壽限無」も正に三舍を避けるであらう恐しいも

の。氏は折角苦心して名を拵へて待つて居るのに、生れる子も生れる子も女ばかりで張合がないとコボして居るさうですが、これは生れて來なくて幸福、こんな名前を付けられたら實際災難であります。(拍手)

シエルリング曰く、

「彼をして先づ理論的に自己を崇拜せしめよ、然らば實行的意志は直ちに來らむ」と。

私の「先づ姓名を尊重せよ!」のスローガン亦同じ精神より生れ出たものに他なりません。即ち五聖閣綱領第三項に擧げてあります如く、自己の名を尊重するは自ら省みて徳を磨くの門であつて、發奮精勵、努力向上皆之に依つて起り、高尚なる品位、英邁なる人格亦之に依つて生ずるのであります。更に又父母長上の名を尊重するは孝悌忠信の誠を樹つる所以であつて、衆庶の名を尊重するは博愛慈善の道に入る基たるべく、而して、畏くも至尊の御名を崇仰し、大日本帝國の名稱を尊重する思想は總て國體の尊嚴を護り、皇運の無窮を禱る忠君愛國の大精神に透徹する根本となるのであります。(拍手大喝采)

然るに先づ第一に尊重せむとする自己の名が「有無子」であつたり「お兎園戯」であつた場合

はどうでありませうか！——斯く考へますときに、姓名が如何に大切であるか、姓名の中に含蓄せらるゝ暗示誘導の力が知らず識らずの間に如何にその人の精神肉體に働きかけて居るものであるかは自ら明らかとなつて「姓名は人の一生を支配す」といふ私共の主張が、單に運命學家としての立場から強調するものでないことがよく御理解頂けると存じます。(拍手)

八

### 不思議な運命の導き

さて運命學、或は運命家——と申しますると、諸君の腦裡に直ちに浮ぶのは恐らく例の街頭のログマの先生、即ち羊羹色の紋付を一着に及んで山羊鬚を手抜き乍ら、仄暗き提灯の灯影に人相手相を窺ひ、箒竹をひねくる大道易者の姿でありませう。而して「易者身の上知らず」の嘲笑的諷刺であり、「運命の開拓、そは當人の努力にあらすして何ぞ！」といふやうな皮相の概念ではなからうかと思ひます。——一應それは御尤もの話でありまして、何をかくしませう斯くいふ私もそのかみ血氣にはやつた青年時代には、運命學など云へば一も二もなく迷信呼ばるゝり致したもので、若くして地方新聞の主筆とか何とかいふ肩書を得て得々として居つた時代には、喋せら

るゝまゝに得意然と壇上に迷信打破の叫びを擧げ、運命には勝てないなど泣きごとをいふ奴は意氣地無し、骨頂で談ずるに足らない奴だ、人相の如きは人の心の反映が現はるゝまで、神祕でも何でも無い、易占などは唐人の寢言、五十本の竹箒をガチャ／＼ひねくつて人生が解るものなら誰が苦勞するものぞ！——といふやうな口幅つたいことを申して居つたのであります。

ところが、ある時名古屋で例の如く一席辯じて居りますと、その聴衆の中から突如「辯士に質問がある、易は何故迷信であるか、その理由を明かにして貰ひ度い！」との鋭い一矢が飛んで参りました。口を極めて運命學を罵倒し、冷殺し來つた私ではありましたが、易學はもとよりその他百般の運命學を覗いても居なかつたことでありますから、さア此の質問には見事に一本参つてしまひ、赤くなつたり青くなつたり、(笑聲)暫しが程は立往生の醜態を演じた次第でありましたが「左様なことは今夕の演説の問題外で、與へられた時間には限りがある、お望みとあらば他日ゆつくり説明することゝする」と苦しい逃げを打つて、(笑聲)這々の體で降壇したお恥しい體験の持主であります。

しかし、此の時の口惜しさ、無念さから、「よし、然らばその迷妄の迷妄たる核心を突止めて今

九

宵の恥辱を雪ぎ、同時に迷信打破の出直しをしてやるぞ！」と、斯く決心しましたのが病み付となつて、それからといふもの汗牛充棟もたゞならぬ古今東西の運命學の書を漁り、是を研究すること三十年に近く、「頂きに登りて見れば山並の峰の奥にも嶺は續けり」で、探ぐれば探ぐる程面白く、究むれば究むる程深遠なる運命哲學の妙味にすっかり心酔して、遂にミイラ取りがミイラとなつた形の今日あるを得たことを考へますとき、茲に亦所謂「運命」の不可思議さを痛感せざるを得ないのでございます。

### 科學の領分

——斯様な次第で、知らず／＼の間にあらゆる方面に手が伸び、運命學の八宗兼學をやり遂げました結果、姓名學に於ては全く獨特なる前人未到の新境地を拓き、新學説を樹て、引いては綜合運命學の完成をも成し得たのでありますが、かうして久しい間の無明の世界に灯を點じ、確固不動大盤石の信念に立つて今日の學界に臨み見ますとき、是等形而上學が形而下の學問と全然別個の取扱を受け、一から十まで科學で解決をつけやうと無駄な努力をして居る人達が殆ど全部

であることには驚くの外ないのであります。

成程科學の力は偉大であります。汽車、汽船、而して航空機の發達は世界の距離を著しく縮め、電氣照明の進歩は夜も全く晝を欺き、ラヂオ乃至テレビジョンの發明は聽て世界の果から果の出來事を居乍らに見聞することができるやうになりました。人造人間も現はれて、相當に複雑なる仕事にも生ける人間の代行者として立派に役立ちつゝあります。けれども果して科學は萬能でありませうか？

人造人間、如何に巧妙に動くと雖もそれは決して彼等自らの意志で動くものではありません。大自然が創造した我々人間と同様のものが到底作り出せぬのは勿論、いろ／＼な説はありますが、未だ生れ出づる男女を人間の力で左右することも出來得ないではありませんか。

否、それどころではありません、早い話が彼の營養科學、一時は肉食こそ唯一の健康増進の道だと大いに高唱しましたが、今度は菜食第一といふ主張が全世界を風靡する。——かと思ふといふ此の間まで生水を飲むことが戒められて居たのが今日では大いに之を飲むべしと奨勵さるゝに至り、ビタミンが發見されてからは一にもビタミン、二にもビタミンと、是が大いに



てはやされ、そのビタミンA、並にDを多量に含むで居る肝油は栄養劑の王座を占めて、東京市の小學校中には全學童に是を給與してまでその飲用を奨勵して居るところさへ尠くなかつたのでありますが、つひ此の程例の佐伯榮養博士が、ビタミンは營養上頗る重視せられなければならぬ有效なものである反面に、濫用すれば恐ろしい危険が伴ふといふことを力説し、ビタミンAの攝取過ぐれば發育を妨げ、禿頭を發し、血管硬化を起すの惧れあり、同じくDの攝取過分ならばカルシウム、磷等の新陳代謝を亂し、血液の性質を變へ、神経系統の健康を害ふ可能性を、その有効の蔭に藏して居るから、此の兩つを多分に含有する肝油の濫用は殆ど總ての臟器、骨組織の退行變性を來たし、貧血症、狀も起せば、白血球にも變化を與へ、妊娠中の動物に多量を與ふれば斃死することすらある……と發表さるゝに及んで、學童衛生當局者間に俄然重大なる疑義が生じ、今尙解決を見て居りません。

——斯の如く、猫の目のやうに變り行く科學の、何處に一體我々は絶對の信頼を置くべきでありませうか！ (拍手) 彼の堀内理學博士も喝破された通り、所謂科學信仰家こそ度し難き迷信家でないとな誰が云ひ切れませう！

### 多次元の世界

また、物理學に於てもさうであります。四五年前までは、斯ういふ原因は斯々の結果を生ずるといふ決定的な豫言をしたものでありますが、此の決定主義は相對性原理と相並んで擡頭を見た電子波動説に依つて覆へされ、不確定主義が學界近來の風潮をリードするに至りました。

従つて、斯の如く決定すべからざる世界から如何なる奇蹟が生れて來やうとも不思議はない筈でありますし、一度び多次元の世界でも證明さるゝことになれば、今日我々があるべしとも思ひ得ぬ驚くべき新事實が續々と現はれて、今日の淺薄なる科學迷信家の如きは目を廻す……否、卒倒しても足らない位でありませう。(笑聲)

しかしながら、達観しますれば大宇宙を貫く眞理に二つはないのでありまして、彼の相對性理論に於て、時間と空間が窮極では溶け合つて分離することが不可能であるといふが如く、形而上の學問も、形而下の學問も、やがて到達すべきところは一つでありますから、形而上學、即ち我々の運命學が一般に正しく認識さるゝ日も、最早餘り遠い將來でないといふことは斷言して置い

てよいと存じます。(拍手)

### 運命學の大宗

元來、此の運命學は其の思想に於て、其の目的に於て、極めて高邁望大であり、其の内容に於て、實用價值に於て、頗る精緻巧妙驚くべきものであるに拘らず、過去數千年の歴史を有しながら比較的普及せず、却つて種々なる誤解をさへ受けつゝあつたのは何故でありませうか。——是は要するに此の學問に携はる人々の心掛がよくなかつたからであります。高邁深遠なる運命學を以て、單なる方術、乃至は手段に用ひ、極めて小乘的に考へ、従つて其の應用方面も比較的低级卑俗に止つて居たのが最大の原因と見るべきで、彼の近世の易聖とまで稱されました新井白蛾氏すら兒戯に類するアテモノに熱中して居たなどは誠に歎かましい次第と申さねばなりません。

それが、眞勢中洲氏に至つて稍々易の高邁さを見、高嶋嘉右衛門氏に於て漸く國家社會の諸問題に易を應用し、御承知の如く易學中興の祖と仰がれたのであります。しかも未だ尙大宇宙の大に歸入し、天地の眞理に融合して易を論じたものはまことに乏しいのであります。

——かういふ次第で、易學といふよりは易斷、或は易占とかいふ意味にのみ傾き、自然中とか中らぬとかいふことが批評の言葉として盛に用ひらるゝやうになつたのであります。抑々易は虞世南が「易を知らざる者は宰相たる資格なし」と申して居ります通り、之天地の大道帝王の學、聖人の學、君子の學であると共に、亦庶民必須の學でありまして、當るとか當らぬとか申すのは未だ以て易の眞精神を知らざる人の言、眞の易とはさうしたことを超越した神聖なる學道であつて、即ち我々人間をして天地とその徳を合一せしめむとする一大徳教であり、一大人生哲學であり、一大經世學であります。

その劈頭「乾爲天」の文言傳に「夫大人たるものは天地と其の徳を合し、日月と其の明を合す」と記されてあります如く、人をして天地日月と其の明徳を合致せしむるところの最高無上の徳學であり、智學であり、古今無比の大宗教でもあるのであります。されば易を以て卜占の學と思ふのは其の一面の小を捉へた小乘的の應用であり、是を一大徳教として無窮の生命の糧たらしむるところに易の眞實の價值はあります。

此の、運命學の大本山たる易學に源を發する私の熊崎式姓名學亦同じことで、單に形に拘泥して其の可否を論じ、吉凶を云々するのみでは、未だ小乘的の範圍を脱しないのでありまして、たとひ其の身は救はれても、未だ以て永遠の靈魂を救ふには不徹底なるを免れぬのであります。申すまでもなく、人の姓名は現在より死後永遠への存続であります。従つて眞の姓名學は其の人の現在を救ふと共に未來をも救ふものでなければなりません。即ち姓名は人格であり、人格は魂であり、魂は永遠に不滅のものであるといふ理念の下に、姓名そのものが矢張天地と其の徳を合し、日月と其の明を合するものでなければならぬのであります。——此の觀念こそ、その姓名の持主が直ちに天地日月と其の徳を一にして永遠の生命を保つ意味となるのであり、茲に始めて人を救ひ世を濟ふの實を擧げ得るのであります。

相學亦然りで「心あつて相なし、相は心を逐ふて生ず」の語を意味するとき、自ら天地日月と徳を合する至上境界の意義が解るであります。然るに現在人相手相を表看板にして居り、世人か

らその道の權威と思はれて居る某々氏等にして尙「相學は一つの統計科學である」等と平氣で自己破産をやつて居るのはまことに困つたものであります。

幸運兒を指して「何といふよい星の下に生れた人か……」とは誰しもいふ言葉であります。運命學に在つても生年月日時相互對照に於て生ずるXを以て通俗的に「星」と稱し、是に據つて先天運、即ちその人の持つて生れた宿命を知るのであります。此のXとは人相、手相、而して父母が偶然に命名した姓名の、その「悉くが一致して居るといふ事實を、前述の相學家諸君に於ても知つた曉には流石に「人相も手相も一つの統計學である」などいふ妄言は吐き得ないであらうと存じます。

即ち、運命學は、小乘的皮相の見地からならば一種の方術であり、方術は單なる方便とも見へるでありませうが、其の内面の眞精神は人倫五常、其の他あらゆる人間道徳の根本と、社會道徳の基調を教へて、小にしては自己を完成せしめ、大にしては人生向上の心の糧たらしむる學問でありまして、更に其の奥に進まば、大宇宙の眞理に歸入して人類に與へられたる眞の使命を完了せしめむとする絶對無二の信仰の極致に導く學道であるのであります。(拍手)

## 道は近きにあり

今や國を擧げて内外共に頗る多事多端、我々九千萬國民は打つて一丸となつて國難に當らねばならぬ重大なる秋に際會して居るにも拘らず、所謂赤の浸潤は年を逐ふて甚だしく、思想界は愈々混濁して人心安立を失ひ、社會の統制漸く亂れむとするに及んで、朝野の識者は遽かに狼狽し口を揃へて宗教の必要を説き、信仰生活の貴重なるを云々するやうになりましたが、斯の如きは私が夙に二十年來唱導し來つたことで、此の信仰生活の表面化、——言葉を換へて申しますと、最も入り易い道程として齋藤首相が唱へて居られます例の「自力更生」などいふ言葉も、先年私が明治神宮御造營に際して奉仕の爲め上京し來つた全國の青年團、其の他に普ねく力説した「健思行」主義ほどに徹底したものではありません。

「健思行」主義とは何ぞ？ 即ち、

身體も心も健かに

ものごとによつて考へて

眞面目にうんと働けよ

といふ、心身の健康を圖り、思慮を周密にして實行貫徹せよとの至極簡單な、至極當り前な、誰でも日常不用意の間に考へ、論じて居ることでありながら、さて中々その實行が難しい修養の道であります。

すべてものごとは手近より始むべきで、また尊き幾多の教訓は常に我々の身邊に轉がつて居るが、世人の多くはあまりに卑近なるが故つひうか／＼と是を見逃して居るのであります。(拍手)  
道は近きにあるのであります。八萬四千の釋迦の法門も、老子の著はす五千の文も、孔子の説いた二萬三千の語も、煎じ詰むれば一の一點に歸してしまひます。一は即ちものゝ單位でありまして、收むれば密微に隠れ、また放てば六合に充ちますが、その最も手近なるものゝ單位を、何彼といふより我自身とする、即ち「一切を疑ひ盡して尙遂に疑ふ能はざるもの、自己の存在是也」で、我が姓名尊重思想の根元は實に茲に發して居るのであります。而して『「心道聖義」八十有一章中の第七十六章から七十八章に及ぶ「高らかに我が名を掲げ、清らかに我が名を尊ぶ、之を一心の一步と爲し、人格完成の門と爲す。高らかに父母長上の名を掲げ、清らかに父母長上の名

を尊ぶ、之を孝悌忠信の所以と爲し、百行の基となす。高らかに衆の名を掲げ、清らかに衆の名を尊ぶ、之を謙讓の萌芽と爲し、社會倫理の礎と爲す。

至尊の御名を仰ぎ尊み、大日本帝國の名を尊み重んず、之を忠誠の發祥と爲し、之を護國の心根と爲す。

名を輕んずものに人格なく、名を輕んずるところ倫理なく、名を輕んずる心愛國なし。」といふ垂示は、即ち個人としてはその人格を完成し、安心立命を得ると同時に、是を衆に及ばしては民心を振作し、時代の更生、國運の打開、皆姓名尊重の大義に基づくことを説いたものでありますが、彼の昨春世界人の心膽を奪つた廟行鎮の爆弾三勇士に、あゝした超人的な勇猛心を與へたのが、實にその原隊久留米工兵隊の守護神高良神社であつたといふ事實、——即ち三勇士は爆薬筒を抱いて一心に『高良様』を念じながら敵陣に突入したのだつたといふ、——この守護神高良様を祈る心、それなのです。それが姓名尊重思想の具現でなくて何でありませうか。(拍手)

また、一昨年若くして逝いた黎明期の我國女子スポーツ界の女王人見絹枝嬢が、去る大正十五年スキーデンに開かれた第二回女子オリムピック大會に、その身一つに大日本帝國の名譽を擔つ

て出場した時の一挿話にかういふお話があります。

このとき、嬢は世界のNO.1と云れた強敵、英國のガン嬢と勝を争つたのでありましたが、右脚の工合が悪くてどうにも平常の調子すら出し得なかつた。然るにプログラムは容赦無く進行して、愈々走幅跳の決勝戦のスタートに立つ時が参りました。——その時です、泣いても笑つても此の一番である、是に勝たなければ此の大會に祖國日本の日の丸は一度も掲揚されずに終るのだ！と思つたとき、嬢の頭に閃いたのは大阪驛頭に餓けられた恩師木下東作博士の言葉でありました。博士は嬢に一着のユニホームを與へて、

「是を着て、僕と共にある氣持で最善を盡して来てくれ給へ、それから、たゞ一人でもならぬとき、泣くにも泣けぬといふやうな場合に行會つたら、眼を閉ちて日本の神様を祈るのだ、きつと救はれる。」

と訓へられたのでした。

——そこで、人見嬢はスタートに立つて祈つたのです。「どうぞ跳ばして下さい、たゞ一度、たゞ一度……。」と。

さうして涙に霞む三十米の助走路をひた走りに走り、夢中に跳んだのが、——五米五十の新記録でありました。勝つたのです、見事に勝つたのです、日章旗は始めてマストに高く掲げられ、唳々たる君が代の奏樂は起りました。(拍手) けれども人見嬢とマネージャーの黒田氏とは、たゞ二人限りの日本人として、無限の感激に相擁して泣くばかり、その君が代の合唱にも聲が詰つて、とぎれ／＼にやつと歌つたとのことでありますが、如何にもさうであつたであらませう。

——この人見嬢を勝たした力、それが即ち、心であり、心は姓名尊重思想の根元を爲すものであります。(拍手)

此の實例を見よ

しかし、惜しむべし、この人見嬢も未だ眞の姓名學道を修めなかつたばかりに、その姓名の有的數理暗示のまゝ、青春二十五歳にして忽然と逝いてしまひました。

人見嬢の姓名を剖象して見ますに、



といふことになりませんが、此の五格剖象法こそ熊崎式姓名學の眞髓でありまして、舊式の姓名學にあつては名前の字劃數、——この字劃數も舊式とは異なり、最も信頼するに足る康熙字典に準據し、文字構成の淵源を採つて正確を期します。——それを合せて是が人の中年前の運を司り、姓と名の合數を以て中年後を司るといふ、極めて單調なる方法をとつて居りますが、私は易學の理法に基いて姓の合劃數を「天格」とし、名の合劃數を「地格」とし、天地間に生ずる森羅萬象の生成化育を司るものは即ち人也との意味から、姓の下文字と名の上文字の劃數を合せて「人格」としてその姓名の中心部位に置き、最も重く観ることに致しました。

而して凡そその表あれば裏あり、内あれば外あるは萬物共通の大法でありますからその中心部

位である「人格」を抱擁する「外格」を是に次で觀察し、更に斯く上下に分ち、表裏を見るも、もと是一個不離の姓名でありますから、總ての合劃數を「總格」として觀察し、また此の天人、地三才配置の順逆に依つても重大なる結果を來す靈力を發見したのであります。

でありますから、此の剖象法を以てして、その數理音韻の靈動力に對照するとき、適中率一〇〇%の事實が擧り、萬中一の例外を許さぬ實際が出て參りますのは不思議でも何でもありません。

されば近頃では醫家に於て患者の診斷に私の姓名學を應用する向が大分にありまして、現に大阪の大串醫學博士の如きは、私が公刊した著書を一讀したのみで數千の患者に實驗してみた結果が、實に的中率八八%乃至九〇%に及んだ。世界の學界に於ても實地に用ひて八〇%以上の適中率を擧げ得る學説は尠いのであるから正に驚異であるとして、時々克明にその人名を列擧して報告して參る位であります。

——餘談に亘りましたが、此の五格剖象法に照らした人見絹枝嬢の前運、即ち地格の二十一は、頭領運と申しまして獨立權威の性を有し、家を興し名を成して譽あり、極めて貴重なる運格であ

りますから、よくその天分を伸ばして、一少女をして忽ち世界の人氣者にしてしまひましたが、是が男性であれば至極よかつたのだけでも、女性であつた爲めに強きに過ぎて孤寡に陥る誘導から免るゝ能はず、しかも主運を成す人格部に二十の短命非業數あり、副運の外格十にして是亦萬事終り去つて空虚零暗、功を收めむとして障害多く、三才の配置宜しきを得ざるものは殆ど中年にして鬼籍に入るといふ凶數、後運の三十亦浮沈極まりなく、善惡定め難き數で、善運に乗ずればその成功は頗る大であるが、一度非運に陥ればその困苦は測るべからざるものがある暗示を持つて居るのであります。

されば是であるが爲めに競技界のやうな必死を賭ける特殊の世界に入つて行きもし、また前運である地格二十一の頭領運と相呼應して一時はあれだけの大成功を見たわけでありましたが、年齢に於て漸く後運の暗示誘導が強く働くに至つて忽ち健康を損ね、その二十五歳姓名易象「水地比」歸魂の卦に相當するに及んで遂に靈魂天に歸してしまひましたのは、返すくも哀惜に堪へません、また是非もないことであります。

——斯くの如く、數理の暗示誘導力の示現は絶對のものでありまして、何人と雖も是を否定す

ることはできません。

考へても御覽なさい、日月星辰の大から細菌微塵の小に至る諸々の物象はもとより、眼に見えぬ電気や磁気、もつと手近なもので我々が一瞬時も呼吸せすには居られぬ空気も、皆悉くある数の定律を基調とする元素が離合集散して成るを思へば、即ち宇宙間に存在する一切萬物、如何なるものも数の支配より免るゝことはできないではありませんか、數即理で、數そのものの中に理があるのでありますから、是で解決のつかぬものはないのであります。同時に是を破ることは不可能のことに屬します。

文字の解釋は人に依つて異りますが、是を數に譯して啓示すれば萬人悉くその解釋は一致するのであります。常住坐臥、寢ても醒めても、又死しての後も未來永劫に「我」を代表し、「我」を傳承する姓名が、それを表現する文字の數理暗示に支配されるものは、是當然過ぎる程當然でありまして、健康を左右し、性格を作り成し、成功も失敗も、長壽も短命も、皆悉く是が働いての結果であることは、科學的にも立派に證明することができるのであります。若しもこの暗示誘導の力に疑ひを持つ人がありましたら、その人は教育の全部をも認めないといふ結果になるわけ

で、つまり大へんな認識不足と云はねばなりません。(拍手)

### 自力更生を爲さしむるものは？

しかし、未だ一部の人は「運命は努力に依つて開拓すべきもの、努力以外に己れの運命を開く鍵があるものか！」など、申します。努力に俟たねばならぬことも勿論ではありますが、その努力を爲さしむるもの、奮起せしむる力——それが即ち眞の運命であります。されば姓名にさうした暗示誘導力の強いものがあれば、それが早く發顯すること亦申すまでもありますまい。

一にも修養、二にも修養といふ人に、私は且つてかう聞いてみたことがあります。

「それなら貴下は寢て居る間にも修養しますか？」と。するとその人は、「先生それは無理です」と苦笑し乍ら答へましたから、私は更に反問致しました。

「それならば寢て居ると死んでしまつたのとはどう違ふか？」と。——眠つて居るのは意識の一部が休むのであつて精神は依然働いて居るのであります。でありますから、眠つて居る間に努力や修養はできませんが、暗示の力は覺めて居ると眠つてゐるとを問はず、四六時中我々の腦細



胞に絶へず働きかけて居るので、此の力の蓄積が身體精神を時々刻々に變へて行くことは、あまりにも明らかな事實であります。故に修養、努力に依る運命開拓と雖も、その原動力を爲す暗示誘導の力なくしては出来得ないわけなのであります。

——で、前に申しました「自力更生」などいふ言葉にしましても、「今日疲弊の極に達したる農村や中商工業者に自力更生を強ふるのは、瀕死の病人に冷水浴や體操をやらすやうなものだ」といふやうな非難の聲を放つた人がありましたが、斯の如きは思はざるも甚しいもので、瀕死の状態にあるが故にこそ自力更生を説かざるを得ないのであります。瀕死の病人は、體力已に衰へて身動きが出来ないまでも、その精神に於て、石に嚙りついても生きねばならぬ、斷じて死なぬぞ！との信念を保ち得たならば、醫療の効果も擧つて九死に一生を得ることもできませうが、自ら氣を落して、どうせ助からぬ命だ、今日死ぬだらうか明日は死ぬだらうかとクヨクヨして居たならば、薬も手當も效はなく、助かる筈の病人も助からぬのであります。(大喝采)

古來、英雄豪傑、或は聖賢君子と云はれた人々には必ず確固不拔の信念があつたこと勿論であります。假令歴史に遺り、人口に膾炙する、大人物でなくとも、能く修身齊家の實を擧げて人生の意義を完うして終つた人には、必ず精神的に何等かの動かさる一點を見ることが出来ます。この信念の基礎を、千古に動かさず、萬代に易らざる數理に置くことの、如何に堅實にして、如何に賢明であるかは、最早此上贅するまでもありません。

### 新運命學の眞價

が、然らばそれ程尊い、立派な運命學が、過去數千年の歴史を持ちながら、何故もつと唱道されなかつたのか、その眞價が認められなかつたのか？——との疑問が起るであります。即ち過去の無理もありません。けれどもこの疑問は一言にして明瞭に氷解するのであります。即ち過去の運命學にはそれだけの價値がなかつたので、今日の運命學に始めてその價値が生じたのであります。

如何してか？——それは過去何千年來の運命學は宿命に囚はれ過ぎて、善運の生を得た者は幸福であり、惡運の生を得たものは惡運に終始すると説き、人間如何に努力し、修養を重ねるとも、持つて生れた宿命はどうすることもできない、それが即ち眞の運命である。若し強いて惡運

の桎梏を免れむと欲するならば、そはたゞ未來子孫の上に自己の積善を傳承せしむるより以外に方法はない。……とかういふ風な、一般宗教の未來觀と同様な説き方でありましたから、嘗に救濟の道とならなかつたばかりか、場合によつては善運に安心して却つて身を謬り、或は亦一生免れ得ぬ惡運といふに悲觀懊惱して、運命を知つたばかりに生涯を闇黒裡に送るやうな馬鹿々々しい結果を見たのであります。

此の幾千年來傳統の宿命一點張の、陰慘極まる運命學を根底から打破つて、新生命を創造し、人格を轉換し、たとへ陰鬱なる先天運と雖も忽ち明朗なる後天運の暗示誘導に依つて避生せしめ得るといふ、運命學の大革命こそ我が熊崎式綜合運命學の完成であります。然し乍ら研究未だ足らぬ一部の人々には充分に之を信ぜず、或は信じつゝも幾分の疑問を残して居る向もないとは申しませんが、事實は何よりも雄辯なりで、是を立證する日常幾多の事實は、僅かに十年前までは夢想だにしなかつたラヂオやテレビジョンが、今日では三歳の童子も常識とするに至つたと同様に、不信も目を逐ふて確信とならざるを得ない實狀にあります。是に就いても面白い實例がありますから一つお話致して置きます。

### 生きて居る物語の人物

長谷川伸氏の初期の作品に『めぐりぞ逢はむ物語』といふのがございますが、これは全然假空の創作物語であつたにも拘らず、非常に似通つた事實が存在して、しかも驚いたことに、作者が勝手にデツチ上げた作中の人物と同名の人の墓までが現はれたのであります。以來長谷川氏は惡役の名をつけるのが恐くなり、『何卒日本中』に是と同じ名前がございませぬやうに。……』といふ所に祈つては瞑目暫し、やがて勇敢にピタリと命じて了ふことにして居る。……といふやうな内輪話を昨年某誌に發表して居り、吉川英治氏も亦「かうしては翌月が困ると知りつゝも、自分が作中の人物に引づられて思ひももうけぬ方へ走つてしまふことがある。小説中の人物も活字となつて半歳もこの世の息を吸ふと、創造者の自由にもならない、生命だの、運命だのが生じて來るものだ。」と云つて居ります。

この大衆作家の兩大關の、期せずして一致した打明け話は、姓名の數理暗示といふものが、單に實在の人物の運命を左右するばかりではなくて、小説中の架空的人物と雖も動かさずに置かぬ

ものであることを如實に物語るものでありまして、試みに如何なる小説中の人物を捕へて来て熊崎式姓名學の五格剖象を加へて見ましても、必ずその數理の示して居る通りの性格の持ち主であり、その通りの運命を辿つて居りますことに一驚を喫せぬわけには参りません。

且つは新派悲劇の獨蔘湯とも謳はれ、昨年あたりもその何番煎かど尙大人氣を呼んだ程の、誰知らぬものゝない彼の『不如歸』の女主人公

片	4	12
岡	8	19
浪	11	14
子	3	
		26

の如きも、その地格十四は浮沈に憂へて終始する孤獨不如意の凶數でありまして、家族縁に薄く、しきりに心を勞して功無く、同じく辛勞絶へず、病弱、短命の暗示強き人格の十九數と、變怪數奇、波瀾萬丈の總格二十六數の暗示、並に人格、地格の配置に見る急禍急變の靈導そのまゝの運命といふべく、しかも、是が川島家に嫁いで、

川	3	13
島	10	21
浪	11	14
子	3	
		27

となりますと、人格部に二十一の寡婦運が現はれ、總格に二十七の批難運が生じまして、假令自身温順なりと雖も裏面に批難を免れぬといふ二十七數の凶暗示から、遂に離婚となり、即ち二十一數の寡婦運茲に示現し、遂に片岡浪子の凶名の通りに若くして逝いて居ります。

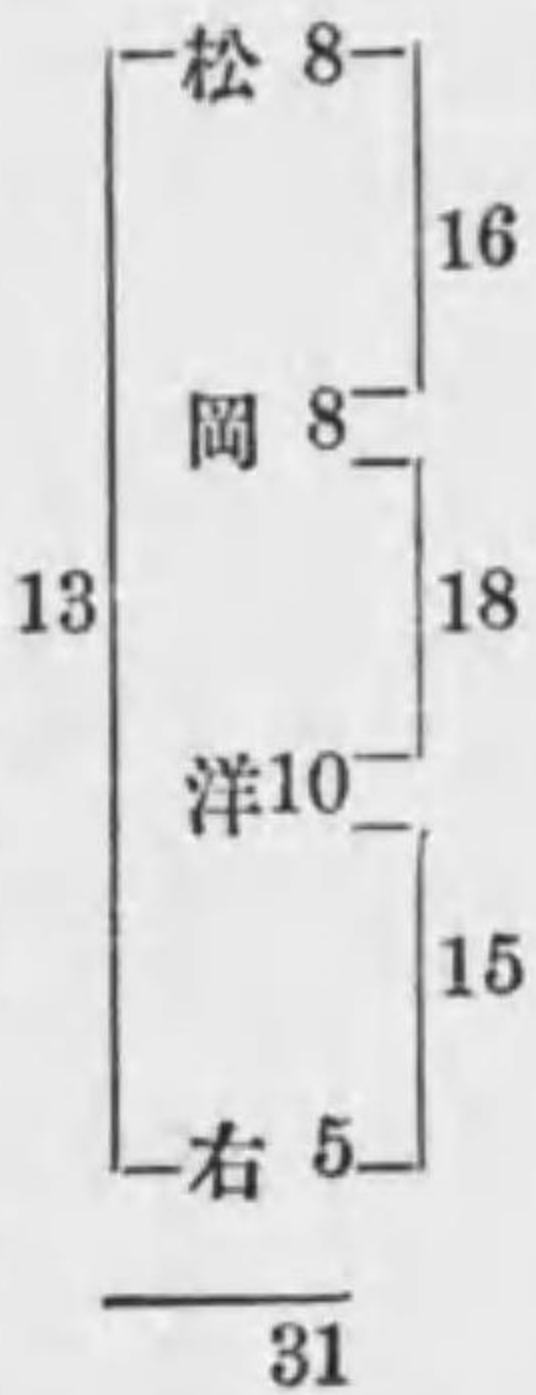
川	3	13
島	10	18
武	8	15
男	7	
		28

とてまた同じこと、前運十五の慈祥運、人格部十八の一度志を立てるや萬難を排して之を貫かすんばをかね鐵石心と相呼應して美しき戀妻を獲得しましたが、副運外格に零闇空虚、非業逆難

を免れぬ十數があり、後運總格の二十八亦遭難運と稱され、波瀾變動頗る多く、男女共に配偶者と生死別のあるべきこと、數理暗示の明らかに示して居るところであります。(嘆聲聞ゆ)

——斯様にして、萬有の根元たる一より基本數の極數たる九に至る、九と九との交錯八十一數の含蓄する靈動力が、人體を代表する姓名の部分々々に如何に働くか？——それを一々申し上げますと、諸君は各自の姓名を剖象して大略の吉凶を自ら判断し、基礎運、成功運を窺ふことも出来、また人の名刺を一瞥したゞけで性格を知ることなども何でもないこととなるのであります。斯くては到底二時間や三時間に盡せる筈もありませんから、その詳しいことは何れ私の著書に依つて御研究を願ふとしまして(編者註、先生の著作目錄付八十一數の數理を説いたリーフレット御希望の方は大森區新井宿六丁目、又は神田區須田町一ノ五、五聖閣に申込次第贈呈されます。)姓名尊重といふ、一番手近な道が一番己れに忠實であり、同時に社會道德の最も正しき定規であり、而してまた國恩に報ゆる最善であることを重ねて力説し度いのであります。

### 松岡全權の姓名



それには、全世界注目の的であるジュネーブの槍舞臺に祖國日本を脊負つて立ち、大小五十六ヶ國を向ふに廻して舌三寸に小氣味のよい日本刀の切味を見せた、彼の松岡全權の姓名を拜借するのが最も適切であると存じますから、茲にもう一度剖象を試みることを許して頂きます。

即ち性格を表示し、また主運を爲す人格部の十八は、偉大なる権力と深遠なる智謀を有し、鐵石心、その一度志すや堅を破り難を切抜け、以て目的を貫徹せずば已まざる誘導最も強く、是を扶くる副運外格の十三亦智慧充滿、學藝才能に富み、智謀才略あり、忍従事に當り、如何なる難關をも突破して大功を奏するの暗示が熾烈でありますのみか、前運地格の十五は福壽圓滿、順和、溫良、雅量に富み、上位の惠澤を受け、徳望を蒐めて富貴榮譽にときめく、有徳、慈祥の好運格であり、後運總格の三十一數は智仁勇を具全し、意志堅固にして千挫屈せず、確實に地歩を

固めて大志を遂げ大業を成す、温良平靜にしてしかも力強き頭領運であります。

その上に、天人地三才の配置亦順を得て、基礎運安泰、成功運順調、心身の健和自ら思ふがまゝに全能力を發揮し得る、まことに稀に見る良名の持主であります。

さればよく出所進退を諍らず、頑迷不戻、認識不足も甚しい聯盟諸國を相手にしてあれだけの働きができたのでありまして、此の未曾有の非常使節として唯一無二の適任者でありましたことは、何よりも姓名學上から立證されて居ると申してよろしいと存じます。(拍手)

而して、氏が五十歳の易命は「風山漸」の卦に相當して居りまして、貞しき家を守り、正しきに順つて漸進すれば天下を正しくすることができるといふのとき、その爻辭に、

「鴻漸于陸。其羽可ニ用爲ニ儀。吉」

とある如く、終りに至つて空高く飛上るが、その鴻の飛ぶや列を爲して亂れず、實に整然たるもので、人も仰いで是を見、人道の儀表とするといふのであります。

オール全權中隨一の雄辯家と謳はるゝ氏の大熱辯も、如何せむ東洋の事情に暗き事實上の歐羅巴聯盟の頑迷途に度し難くして、結局、日本の聯盟脱退を見ることになりましたが、然しその天

空高く飛立つとも列を正して亂れず、實に正々堂々たる我が代表部の引上げぶりであつたのであります。(拍手)

### 運命開拓の要諦

さて、以上思はず長きに亘りまして、頂いた時間も既に超過致しましたから、此邊で結論に急がうと存じますが、要するに運命とは、或るもの(又は或ること)より或るもの(又は或ること)に至る、空間的延長と時間的徑路とを稱する言葉でありまして、そこに與へられたるもの、即ち發生は萬事萬物の單位でありますから「命」であり、此の「命を宿す」に於て宿命といふ語を成すのであります。その宿命に對する延長線、乃至放射線の姿を後天的の運命と謂ふのであります。言葉を代へて申しますと、茲に一點を與へる、——即ち「い」であります、是には自らなる命が宿ります、それが宿命であります。この「い」を延長する「い」それが後天運であります。「い」は即ち點、「一」は即ち線、この點と線との交叉斷續、強弱按配、曲直離合、細大輯錯する種々相こそ所謂「運命」の姿なのであります。

でありますから、運命開拓の要諦は、諸君が正しい運命を知つて巧にその運命の波に乗ることにあります。若しよくない運命、弱い運命を宿命に持つて生れ來つたならば、早くそれを知つて、吉きに轉換し、強きに變る暗示誘導力を持つた姓名の後天運に乘換へればよいのであります。姓名は即ち未來永劫に亘る自己の代表者、數理は即ち大宇宙の支配者でありますから、此の自然の大法則に順つた姓名の暗示が三世を貫く作惡の因をも清算してその人の前途を明るく展いてくれることは、宇宙萬態の運行しつゝある軌道の狂ひなき限り永遠に動かさざる眞理であり、従つて盤石の信念、是より堅きは得られない筈で、この信念に生くるとき、世界は忽ち明るいものとなり「百萬の敵我一人往かむ」の勇猛心も自ら湧き起るのであります。従つて之れは、この最も手近な、最も實踐容易な道である姓名尊重思想の強調に依つて各自の人格完成も、社會淨化も、富民強國の實も、敢へて勞せずして擧げ得るといふことをくりかへして降壇する次第であります。(拍手大喝采)

昭和八年七月五日印刷  
昭和八年七月十日發行

【非賣品】

編輯發行 兼印刷人 東京市日本橋區本町二丁目一ノ二 田 中 克 幸 (春 勝)

印刷所 東京市日本橋區本町二丁目一ノ二 峯 社 電話日本橋(24)一九五六番

發行所 株式會社 美松百貨店內 東京市麴町區有樂町一丁目二番地 運命開發展覽會 電話銀座(57)自〇〇〇一〇一〇番 至〇〇〇二〇番

終

